

# 電気のふるさと

北海道泊村 特集号



トップにきく

牧野 浩臣さん × 新 欣樹  
(泊村長) (電源地域振興センター理事長)

PICK UP!

氷上の熱気を明日への推進力へ  
～アイスリンクを活用した泊村の元気作戦～

My Angle ～専門家の視点から～

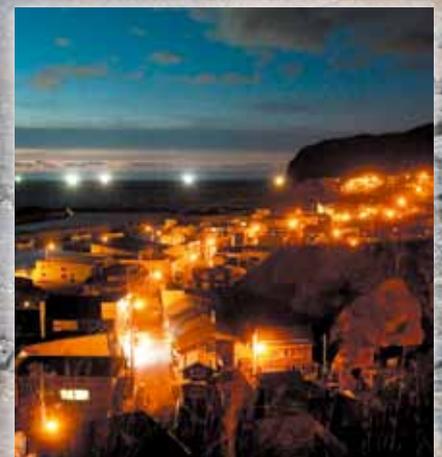
商品開発におけるコンセプトづくり

センター掲示板

「産品相談・商談会」のご案内 ほか

ご当地自慢

鯨御殿とまり





泊村長  
まきの ひろあき  
牧野 浩臣 さん

昭和21年生まれ。昭和48年泊村役場に就職後、国民宿舎もいわ荘支配人、教育委員会次長、老人ホームむつみ荘荘長などを歴任。平成12年より泊村助役、副村長を経て、平成20年1月に泊村長就任。現在1期目。

トットプロ

まき

## 北海道泊村<sup>とまり</sup>

# 牧野浩臣さん × 新欣樹

(泊村長)

(電源地域振興センター理事長)

開拓から四百年、かつてはニシン漁と炭鉱で栄えた泊村。炭鉱閉山による人口急減の後、原子力発電所の誘致により活性化をはかってきた。村づくりの実績、今後の取り組みについて牧野村長にお話を伺う。

### ■北海道泊村 (人口:約2,000人 面積:82.35km<sup>2</sup>)

北海道の西部、積丹(しゃこたん)半島の南西に位置しています。ニセコ積丹小樽海岸国立公園の区域に指定されており、日本海と山々に囲まれた美しい景観に恵まれています。村の南部に位置する泊発電所は北海道初の原子力発電所であり、北海道の電力の約4割をまかっています。

### ■原子力関連施設

#### 泊発電所

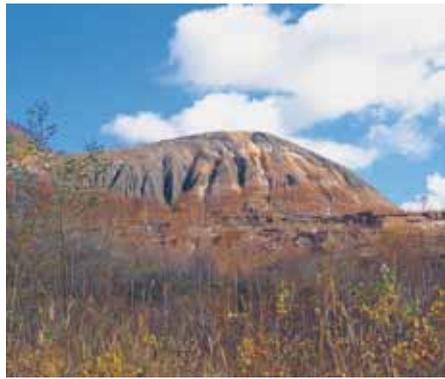
出力:207万kW(1~3号機計) 運転開始:平成元年6月(1号機)  
事業者名:北海道電力株式会社

### ■今号の表紙

カブト岬(北海道泊村)



恋愛成就の伝説が残る盃(さかずき)漁港の弁天島には、良縁や子宝を望む女性が多く訪れる。



昭和39年に閉山した道内最古の茅沼炭鉱跡があり、泊村は古くからエネルギーとの関わりは深い。



村の中心産業は漁業。ウニ、アワビ、サケ、ニシンを中心に増養殖漁業の育成に取り組んでいる。写真は泊漁港。

## ニシン漁と石炭で栄えた村

**新** 明治時代、泊村はニシン漁と採炭で、たいへん栄えていたと聞いておられます。その後、ニシン漁の衰退や、石炭鉱業の斜陽化に見舞われ、苦難の連続だったと思います。泊村の歴史をお聞かせください。

**牧野村長** 泊村の歴史は慶長六年(二六〇一年)、先住民(アイヌ)の開拓により始まったそうです。泊村の名前の由来はアイヌ語の「ヘモイトマリ」で、言葉の意味は「マスを寄せる入海」です。本州から来た人々も住みつき、漁業を中心に生計を立てていました。

安政三年(一八五六年)、一人の漁師が茅沼地区の山中で「燃える石」を発見し、道内最古の炭鉱である茅沼炭鉱の歴史が始まりました。「燃える石」を発見した漁師はニシン漁を生業としていた武井一族の使用人として、泊村におけるニシン漁と石炭の密接な関わり合いを象徴しています。

**新** 泊村でのニシン漁はいつごろがピークだったのでしょうか。

**牧野村長** 明治後半から大正十年頃がピークでした。ニシンは食用のほか、各種原料にも用いられていました。水揚げされたニシンは現地で釜茹でにした後、压榨機に入れて油を

絞り、魚油と絞りカスに分離しました。魚油は灯油に、搾りカスは発酵・乾燥させ肥料にしていたのです。ニシンから作った肥料は養分に富み、「金肥」とも呼ばれて重宝されました。

豊漁のときは、陸にあげきれないほどニシンがとれ、袋澗という海岸に作った水槽のようなものに一時貯蔵しなければならぬほどでした。ニシン漁の最盛期には、財をなした網元たちが贅をつくした番屋を村内に建築し、その数は五十軒を超えていました。村内の郷土館「鯨御殿とまり」には二軒の番屋と邸宅が移築復元されており、村の有形文化財に指定されています。いずれも壮麗な建物であり、往時の繁栄ぶりに思いをはせることができます。

**新** 昭和に入ってからニシン漁は衰退しましたが、石炭鉱業は盛んだったそうですね。

**牧野村長** 茅沼炭鉱は安政三年(一八五六年)に発見された後、徳川幕府および明治政府による官営事業として開発がすすめられました。最初は外国船への燃料補給が主要な用途だったようです。明治時代に入ると、夕張や幌内等での炭鉱開発がすすみ、茅沼炭鉱は採算面で見劣りするようになりました。明治十六年、茅沼炭鉱の廃止令が出され、官営事業は終了しました。

当時、水揚げされたニシンを釜茹でするのに使う燃料は薪から石炭に移行しつつありました。網元にとつて石炭は必需品でしたので政府に炭鉱の払下げを申請し、明治十七年に茅沼炭鉱は民営炭鉱として再出発を果たしました。

現在の泊村の人口は二千人弱ですが、炭鉱が活況だった頃は一人を超過していました。戦後、日本のエネルギーの主役が石炭から石油に移つ



電源地域振興センター理事長

## 新 欣樹

昭和18年生まれ。昭和40年、通商産業省入省。科学技術庁長官官房長を経て、中小企業庁長官などを歴任。石油公団理事などを経て日本原子力発電株式会社副社長、平成21年7月より財団法人電源地域振興センター理事長。

ていく中で、茅沼炭鉱の経営も厳しくなり、昭和三十九年に閉山されました。また、泊村にはもう一つ泊炭鉱という炭鉱があり、日常生活に必要な石炭を採掘していたのですが、こちらも昭和四十四年に閉山されました。炭鉱閉山に伴う人口流出は非常に激しく、昭和三十五年には約九千人だった泊村の人口は、十年後の昭和四十五年には約四千人になってしまいました。

## 原子力発電所による 村の再生

**新**・泊村はこれまで、ニシン漁が衰退した後は石炭鉱業に、石炭鉱業が衰退した後は原子力発電にというように転換をはかってこられました。石炭鉱業の斜陽化とともに企業誘致

や財政再建に苦悩している自治体が北海道内には多いのですが、泊村は原子力という新たな基幹産業を見出しました。発電所立地の経緯はどうだったのですか。

**牧野村長**：泊発電所計画は、昭和四十二年に北海道が泊村を含む三村を原子力発電所建設予定調査地点候補地として選定発表したことからはまりました。その後、泊村、共和町、岩内町、神恵内村の四力町村における官民の誘致活動が行われ、昭和四十四年には北海道初の原子力発電所の建設予定地が共和・泊地区に決定されました。

私が泊村役場に就職したのは昭和四十八年ですが、その頃、北海道電力(株)はサイト決定のために岩盤調査を実施していました。共和町は砂地が多く、農業が盛んで人口の多いところ。一方、泊村は岩場が多く人口は寡少です。発電所は岩盤がしっかりしており、人口が少ない泊村内の海岸部に立地することに決まりました。

当初反対運動が盛んでしたが、昭和五十五年頃に四力町村の漁業協同組合が発電所誘致に理解を示すようになり、発電所の立地が進展しました。一号機は平成元年に、二号機は平成三年に営業運転を開始しましたので、計画から運転開始まで二十年以上かかったことになりました。



平成3年に建設された「泊村栽培漁業センター」では毎年約20万粒のウニの種苗を生産している。

**新**・原子力発電所の誘致には大変な苦勞が伴いますが、誘致によつて村は大きく発展したのではないのでしょうか。

**牧野村長**：一号機が営業運転を開始した翌年の平成二年から二十億円以上の固定資産税収入が入るようになりました。それに加えて電源立地地域対策交付金の収入もあり、財政にゆとりができました。現在も北海道内唯一の普通交付税不交付団体となっております。

それらの収入を原資として村内全域に下水道や光ファイバーケーブルを整備したり、夏期でもアイスホッケーをすることができ、「泊村アイスセンター」とマリノク」やパークゴルフ場のある「とまりカブトラインパーク」などのスポーツ施設を整備したりするなど、村民の生活向上に役立つ施策を実施することができました。

## 村おこしの取り組み

**新**・今でも泊村の中心産業は漁業のようですが、最近の状況はいかがですか。

**牧野村長**：泊村では、春夏はイカやマスが、秋冬はサケやホッケが多くとれます。ほかにはカレイ、ウニ、アワビ、ナマコがとれます。しかしながら漁獲高は減少の傾向にあります。

泊村では「育てる漁業」に力を入れていまして、平成三年に電源立地地域対策交付金で「泊村栽培漁業センター」を整備しました。毎年二百万粒のウニの種苗を生産しているのですが、他の種苗を生産できるかどうか漁協と検討しているところです。

**新**・原子力発電所が縁で、愛媛県伊方町と親密な関係を築いていらっしゃるお聞きしましたが。



愛媛県伊方町との姉妹交流提携を記念して伊方町の杜氏組合の協力で誕生した純米吟醸酒「泊の宴」。

## 今後の課題と展望

**牧野村長**・伊方町とは発電所の原子炉のタイプが同じであることもあって、平成十年に姉妹提携を結びまして、人々の交流や教育、文化の交流が活発に行われています。子供親善大使派遣事業では、毎年、小学校六年生を親善大使として泊村から伊方町に派遣し、伊方町からも泊村に受け入れていきます。親善大使の子どもたちは互いの地で歴史や文化を学び、見聞を広めて帰ってきます。

また、泊村からは伊方町の「きんはいや伊方まつり」に参加し、伊方町からは泊村の「群来まつり」や「HOKKAIDOとまりマラソン」に参加し、互いの地域の特産品をPRしたりして交流を深めています。

伊方町との姉妹提携により、泊村に特産品が誕生しました。姉妹提携を記念して伊方町杜氏組合の協力で純米吟醸酒「泊の宴」が作られました。泊村の特産品として村内で販売されています。

**新**・こうした電源市町村同志の連携は大変参考になります。「HOKKAIDOとまりマラソン」はかなり前から実施していらつしやいますね。  
**牧野村長**・今年で十七回目になります。村内の方のみならず、札幌在住の方や泊発電所に係わる企業の方など道内外から毎年千人近くの人々が参



盃海水浴場を会場に行われる「群来(くき)まつり」の群来は、ニシンの大群が押し寄せること(地元の言い方で群来る)から名づけられた。

加します。原子力発電所の安全性をPRすることをねらいとして始めたもので、泊発電所構内を走る3km、5km、10kmのコースを作っていました。

ところが米国の同時多発テロ以来、原子力発電所の規制が厳しくなり、発電所構内に立ち入るのに身分確認が必要となりました。ランナーを構内入口で一旦止めて身分を確認するというのは非現実的なので、平成二十年度からコースを変更するのとしました。泊村内だけでは距離がとれないので、お隣の共和町内をコースに含めるとともに、3km、5kmの二コースに変更しました。そうしたこともあって、「HOKKAIDOとまりマラソン」は当初の趣旨を果たせなくなったことにより、今年で中止することとしました。別のイベントを模索しているところ

**新**・現在、来年度から始まる向こう十年間の第四次総合計画を策定中と聞いております。今後の村づくりの課題や展望をお聞かせください。

**牧野村長**・第四次総合計画は行政当局と村民とで相互審議委員会を立ち上げ、今年十二月に原案をまとめます。新規施設建設に村民は慎重な姿勢であり、健全で持続可能な財政運営を望んでいます。限られた財源を特産品開発や老朽化した既存施設の建替えなどに投入していくつもりです。例えば、養護老人ホーム、特別養護老人ホームは老朽化がすすんでおり、建替えが必要となります。その際、運営体制を村の直営から社会福祉法人への委託に切り替えることで行政の効率化をはかっています。

それから、住宅新築等奨励金、結婚祝金、就学祝金の支給など、定住促進策を継続実施していくつもりです。更に、村内の開発に適した道有地を村が購入し、住宅を建設・分譲すること、公営住宅の建替えの際に二階建てから三階建てにすること、を考えております。泊村は平地に乏しい地勢ですので土地の有効利用を

はからなければなりません。公営住宅の入居募集をすると定員を上回る応募があるので、こうした定住促進策の効果は高いと考えています。

**新**・住民の福祉を充実することで定住人口減少に歯止めをかけようとしていらつしやいますね。こうした施策の原資に電源立地地域対策交付金が充当されることと思いますが、国に対する要望は何かございますか。

**牧野村長**・交付金の使途の柔軟性を更に高めていただきたいと思います。例えば、公営住宅の建設は交付金の対象外なのですが、交付金の対象としていただきたいですね。

**新**・交付金については、電源地域対策という意味合いの中で、可能な限り使途の柔軟性を高めていくことは必要だと思います。本日はありがとうございました。



PICK UP!

# 氷上の熱気を明日への推進力に

## アイスリンクを活用した泊村の元気作戦

地元の小学生アイスホッケーチームが地域の大会で四連覇を達成。村に活気を与えている。アイスセンター施設を核としてスポーツ交流による振興策を進める泊村の取り組みをレポートする。



# 概要

## CHAPTER 3 (P.10)

### 交流の促進でふくらむ村の未来

泊村アイスセンターの運営だけでは採算はとれない。しかし大学・企業チームの合宿など、新しい交流が生まれた。村は交流人口の増加をどのようにとらえ、地域振興に取り組んでいるのか。村の未来づくりのために進行している行政の施策とは。

## CHAPTER 2 (P.9)

### スポーツが沸き起こす「いきいき効果」

アイススケートに馴染みのない地に建設された「泊村アイスセンター」。村が考えたその目的と効果とは。小学生アイスホッケーチームはなぜ結成されたのか。子供たちはアイスホッケーから何を学び、住民はどんな影響を受けているのか。

## CHAPTER 1 (P.8)

### 村の人々を活気づけるアイスホッケー

たった十年で全道でも有数の強豪チームに成長した泊ブルーマリオンシャークス。その強さの秘密と、それを支えるものは。小学生だけでなく村と地域の大人たちを熱くさせている「長ぐつアイスホッケー」の魅力とは何か。

北海道とはいえ、まったくアイススケートに馴染みがなかった泊村に小学生の強豪アイスホッケーチームが誕生した。また大人たちも「長ぐつアイスホッケー」というユニークなスポーツに取り組み、活気にあふれている。人口の減少や少子化といった問題を抱える中で、村が打った地域振興策とは何か。それによって住民たちはどう影響を受け、どう変わったのだろうか。

## オールシーズン型・屋内リンク完備 泊村アイスセンター「とまリンク」

後志管内で唯一屋内アイスリンクを持ち、一年を通してスケートが楽しめる総合アイススポーツセンター。廃校となった旧泊小学校校舎を有効利用した施設で、愛称は「とまリンク」。

リンクはアイスホッケー公式国際競技規則に沿って設計されており、日本アイスホッケー連盟が認定した公式の大会も開催される。また公式戦を想定した練習ができるため、道内外の高校や大学、企業などのアイスホッケーチームの合宿所としても最適。最近では年間40を超えるチームが訪れるなど大いに利用されている。

施設内には各種トレーニング機器を備えたトレーニングルーム、シャワー室、ミーティング室、フォーム調整室、体育館が設けられ、トレーニングルームは村民をはじめ近隣町村の人たちの健康増進のためにも役立っている。

- 開館時間：午前9時～午後9時
- 休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
- アイスアリーナ使用料：小中学生 100円・高校生 200円・一般 300円
- トレーニングルーム、体育館使用料：一律 200円
- スケート靴貸出料：一律 100円



旧泊小学校校舎部分を活用しつつ、校庭部分にアイスリンクが新設された



最新型のランニングマシンが並ぶ



村民の冬場の健康増進のために各種の機器が備えられている

## 村の人々を活気づけるアイスホッケー

地元の小学生チームが  
大会四連覇を達成

今年二月、泊村アイスセンターで開催された「第十一回泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会」において、泊ブルーマリオンシャークス（以下シャークス）が優勝。みごと四連覇を成し遂げた。

シャークスは、岩宇地域（岩内郡・古宇郡）の泊村、岩内町、共和町、神恵内村の小学生を対象に、平成十一年夏に結成されたアイスホッケーチームだ。現在のメンバーは、男子・女子合わせて十四人。財団法人札幌アイスホッケー連盟にチームが加入している。北海道内には他にも苫小牧、釧路、旭川など七つのアイスホッケー連盟があり、全道合わせて四十ほどの少年アイスホッケーチームがある。泊村と札幌アイス



泊ブルーマリオンシャークス  
監督 澤口 繁豊 さん

ホッケー連盟の主催で毎年二月から三月に行われる「泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会」には、シャークスの他に札幌、苫小牧、旭川、室蘭などから選抜された五チームが参加する。いわゆる「地元の利」があるにせよ、結成わずか十年のチームが並み居る強豪たちを相手に四連覇を達成したことで村や近隣町村は大いに盛り上がっている。

スケートに馴染みがない地域に  
強豪チームが誕生

北海道のウィンタースポーツといえば、日本海側ではスキー、雪の少ない太平洋側ではアイススケートが盛んである。泊村のある地域ではアイススケートに馴染みがなく、シャークスは後志管内では唯一の少年チームだ。

「大人も子供もスケート初心者で、まずリンクに立つて歩くことから練習を始めました」と、現シャークス監督の澤口繁豊さんはチーム結成當時を語る。平成十年、泊村アイスセンターのオープンを機に、村からの呼びかけで小学生のアイスホッケーチームを作ることになった。外部からアイスホッケー経験者二人が、リ



結成6年目には全道小学生アイスホッケー選手権大会でベスト8に進出した

ンクの整備員も兼ねて泊村アイスセンター職員としてコーチに雇われた。メンバーを募集したところ、思いのほか多くの小学生が集まったという。

「始めは興味本位だったと思えます。パイプ椅子につかまってやっと氷の上を歩いていた子供が、どんどん滑れるようになり、やがて夢中でパックを追いかけるようになった。親の転勤で仕方なくやめる子はいても、上手くできないからといってやめる子は一人もいませんでした」と澤口さん。毎日二時間（夕方四時半から六時半まで。土・日は別時間帯）、子供たちは練習に励んだが、当初は試合をすれば連戦連敗。それでも年々上達してゆき、結成時に一年生だった子供が六年生になった六年目には、なんと札幌で行われた全道小学生アイスホッケー選手権大会でベスト8に進出し、第六回泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会で初優勝したのだった。

チームをしっかり支える  
父母たちの熱意

「チームが強くなった要因は、やはりオールシーズン練習できるリンクがあること。それに村の支援ですね。泊村長杯の四連覇は、地元の応援に任せようとする気持ちの部分が大きいのではないだろうか」と、チームの父母会の副会長である高橋鉄徳さんは語る。シャークスでは、主に技術面をコーチが、精神面を監督や父母たちが受け持っている。やはり小学生チームなので、何かと父母たちの支援は欠かせない。たとえば遠征試合の付き添い。宿泊費などは各親が負担する。試合におけるタイムやスコアの管理、場内アナウンスなどの作業も父母たちが受け持つ。休日も返上して子供やチームのために働かなければならない。

「確かに親の負担は大きいのですが、アイスホッケーを通しての子供たちの心身の成長、ほかの地域の子供たちとの交流などメリットも大きい。



泊ブルーマリオンシャークス父母会  
副会長 高橋 鉄徳 さん



市民スポーツとして定着しつつある  
長ぐつアイスホッケー

だからみんな一生懸命です。親だつて遠征先で親同士の交流を楽しんでいます」と高橋さん。シャークスが強くなった要因のひとつに、父母たちの熱い支援があることも確かだ。

## 大人たちはリンクで 長ぐつアイスホッケーに熱中

泊村アイスセンターのさらなる活用を目的として、平成十六年からスタートしたのが長ぐつアイスホッケーだ。長ぐつでプレーするので、スケートができなくても誰もがアイスホッケーを楽しめる。現在、岩宇地域で十五チーム（一チーム十から十五人）あり、泊村だけでも七チームが活動している。プレーヤーの八割が男性、高校生から四十代くらいまでがメインだが、六十代の人がいいたこともある。また中学生だけのチーム、女性だけのチームもある。

「釧路で行われていた長ぐつアイスホッケーの試合を青年部の者がテレビで観たのがきっかけです。これならできそうだからやってみよう」と、見よう見まねで始めました」と語るのは、泊村商工会青年部部長の妹川達也さん。早速、青年部で長ぐつアイスホッケー発祥の地・釧路へ視察に行ったところ、選手たちの真剣さ



泊村商工会青年部  
部長 妹川達也さん

に心を打たれたという。「意外にハードで奥が深い。これはいけると思い村や近隣地域の人たちに声をかけたところ、次々とチームができました。遊びのつもりが、だんだん『勝ちたい』という意識が芽生えてきて、各チームで作戦を練って練習するなど、予想以上の盛り上がりとなりました」

## 全国大会の混成の部で 泊村選抜チームが優勝

平成十七年からは、「泊村長杯長ぐつアイスホッケー大会」も開催されるようになった。ますます地域の選手たちの熱意は高まり、技術も向上していった。そして今年の二月、釧路で行われた全国大会において、泊村選抜が男女混成の部でみごと優勝したのである。

「レベルが上がって強いチームも出てきましたが、泊村を含む近隣地域の親睦を深めることも大きな目的のひとつです。実力に差がありすぎると楽しくプレーできなくなるの

で、強いチームが弱いチームを教えるなどして地域間の差を縮める努力も必要だと思えます。また、四十歳以上のシニアの部を設けるとか、各チームにシニアや女性を必ず数名入れるなど、いろいろと工夫して盛り上げていきたいです」と、妹川さんはさらに意欲的だ。泊村はアイスホッケーで子供も大人も活気づいて

## ★「長ぐつアイスホッケー」とは

釧路が発祥とされる日本生まれのスポーツ。文字通りスケート靴の代わりに長ぐつをはいて行うアイスホッケーで、同じリンクを使い、ルールもほぼ同じ。ただしパックは丸くて柔らかいウレタン製のボールを使用し、スティックも曲がりの角度が異なる。1チーム8人で試合を行い、アイスホッケーのような途中での選手交代はない。試合時間は前・後半5分ハーフの合計10分と短い、かなりハードで疲れるという。

現在、北海道の他に東北や関東にも多くのチームがあり、毎年2月に釧路で全国大会が開催されている。泊村でも平成17年から「泊村長杯長ぐつアイスホッケー大会」が開催され、村内外から毎年10チーム以上が参加して熱戦を繰り広げている。



意外にハードで奥が深い氷上スポーツ

## CHAPTER 2

# スポーツが沸き起す「いきいき効果」

## アイスホッケーが 子供たちに与える影響

平成八年、泊村にあった四つの小学校（堀株、茅沼、泊、盃）が旧盃小学校の敷地へ泊小学校として一校に統合された。泊村アイスセンターは、廃校になった旧泊小学校の施設を有効活用する目的で建設されたの

だ。建設にあたって、泊村ではアイススケートに馴染みがなかったため賛否両論があった。しかし将来を考えた前村長の英断で、オールシーズン型の屋内リンクを備えた施設（当時、北海道で五つしかなかった）が誕生したのである。村では泊村アイスセンターの活用目的として「村の活性化」「氷上スポーツの振興」「住

民の健康増進」を掲げ、そこで考え出されたのが小学生のアイスホッケーチームだった。

「子供たちは抵抗なくスケートに馴染めるし、チームがあれば継続してリンクを活用できる。それにスポーツを通じてルール、マナー、チームワーク、思いやりを学べます」と話すのは、泊村教育委員会の赤平晃さん。泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会は教育委員会の所管で開催している。またアイスホッケーは子供たちに自信を与えたという。

「他の地域の子供たちと試合や練習で交流することで田舎の子特有の物怖じがなくなった。都会の子と対等に戦えるという自信は村の子供たちの成長に大きな影響を与えています」

### 泊村アイスセンターを核として住民に元気を

村はシャークスや長ぐつアイスホッケーチームを様々なかたちで支援している。無料でリンクを提供し



泊村教育委員会  
赤平 晃 さん  
教育次長

ているのはもちろん、用具・防具などもアイスセンター備え付けのものを無料で貸し出している（多くの場合はスケート靴やスティックは各自が負担）。また試合の遠征のための交通費も村が負担している。村の支援の一方で心配なのはメンバー数の減少だ。

「現在、泊村の小学生の数は一年生から六年生まで合わせて百八人。シャークスのメンバーは毎年二十人前後いましたが今年は十四人です。近隣町村と一緒に、今後について考えていかなくてはなりません」と赤

## CHAPTER 3 交流の促進でふくらむ村の未来

### アイスセンターから生まれる外部との交流

現在の泊村アイスセンター利用者は村民を含めて年間約二万人。多い年でも二万六千人ほどだった。人件費、電気代、リンク整備などの維持管理費を合わせると年間約八千万円にもなる。収入となる施設利用料が安いので、とても採算はとれない。電源三法交付金を活用して賄っているのが現状だ。それでも村にとって施設の採算を上回る様々なメリットがあると、泊村役場企画振興課の

平さん。シャークスに参加できるのは小学生まで。地元で中学生のチームがないので、一部の子供は札幌のクラブチームに通うなどしてアイスホッケーを続けている。中学生になつてからは長ぐつアイスホッケーに参加してくる子供も多い。

アイスホッケーだけでなく、村ではトレーニングルームに講師を招き、住民に健康増進のためのトレーニング法を指導するなどの取り組みも行っている。これからも教育、文化、健康を推進する核として、泊村アイスセンターを活用していく方針だ。

西宮勝彦さんは語る。

「シャークスの活躍や長ぐつアイスホッケーの盛り上がりなどで子供から大人まで住民に活気を与えたという効果もありますが、アイスセンターを中心に外部との交流が増えたことも大きなメリットです。高校、大学、企業のアイスホッケーチームのほか、アイスリンクを使う様々なスポーツのチームが合宿、練習、試合などで訪れ、新しい交流が生まれました」これまでに早稲田大学、王子製紙などのアイスホッケーチーム、雪印のジャンプチーム、そして



泊村役場 企画振興課  
西宮 勝彦 さん  
課長

昨年はバンクーバーオリンピック直前に全日本ショートトラックスケートチームが強化合宿を行っている。また全日本女子アイスホッケー大会の会場になったこともある。

「オールシーズン利用できるとともにトレーニング施設やミーティングルームを備えていることもアイスセンターの魅力になっています。合宿などで人が訪れると、旅館、民宿、レストランなどを利用してくれる。また交流は村のアピールにもなり村全体にいろいろなパワーを与えてくれます」と、西宮さんは交流の効果を評価する。

企画振興課ではインターネットのホームページ掲載等により、泊村アイスセンターのPRと合宿の誘致を行っている。

### ふれあいと活気のあるむらづくりをめざして

泊村では第三次総合計画（十カ年計画）の中で、「ふれあいと活気のあるむらづくり」の一環として生涯

スポーツの振興を目標に掲げている。泊村アイスセンターのほかにもスポーツ施設「とまりカブトラインパーク」（パークゴルフ場）が開設され、村内外の人が集うレジャースポットとして利用されている。

「交流とスポーツという面では平成六年から毎年開催されている『HOKKAIDOとまりマラソン』も大きな役割を果たしてきました。また観光交流としては夏のイベント『群来まつり』も毎年たくさんの人を集めています。海岸を走る国道二二九号が整備され、小樽から積丹半島を巡って岩内へと続く『カブトライン』は絶好のドライブコースとなり、観光交流への基盤もできました」と西宮さん。

外部との交流を充実させるためには内部の充実も必要である。泊村は村内の全戸と公共施設を光ファイバーでつなぐ情報ネットワーク「とまりねっと」を整備。家庭と医療機関・役場などを結んで、村一体となったサービスの向上や防災に取り組んでいる。

また「ふるさと定住促進事業」を推進。結婚後三年以上村に住むことを条件に十万円が支給される「結婚祝金」、第二子以降を出産した場合に十万円（一人増すごとに十万円加算）が支給される「出産祝金」などの制度で定住を促進している。

「シャークスのOBやOGも各面で活躍しており、全日本のU18やU16の選手に選ばれています。また、女子では日韓交流で札幌選抜チームの一員として今年OG五名が韓国に遠征しました。今後日本代表が誕生するのも夢ではありません。泊村アイスセンターなどハード面の設備をさらに活用していくため、これからはソフト面をもっと充実させて次

のステップへと進んでいきたいと思えます」と西宮さんは語る。小学生たちの大活躍に元気づけられスポーツと交流による一層の地域

活性化をめざす泊村。氷上から湧き上がった熱い思いをパワーにして進む泊村のこれからの注目していきたい。

## リンクに輝く瞳が 明るい未来へ虹を架ける

### ★パークゴルフ場「とまりカブトラインパーク」

泊村の景勝・カブト岬を眺めるドライブコース「カブトライン」沿いにある村民のスポーツと憩いの施設。雄大な日本海を眺めながらのびのびとパークゴルフを楽しめる。メイン施設であるパークゴルフ場は自然の地形を生かした夜間照明付きの18ホールで、村民をはじめ村外からの多くの愛好家たちで賑わう。



高台にあり眼下には積丹ブルーの海が広がる

公園内にはその他にもテニスコートや多目的広場、バーベキューハウスなどがあり、家族連れからお年寄りまで広く利用されている。

利用期間は4月下旬から11月中旬まで。使用料はパークゴルフ、テニスコートとも村民は無料、村外の方は100円。貸し用具は一律で100円となっている。

### ★村全体を結ぶ情報ネットワーク「とまりねっと」

「とまりねっと」は村内全戸と公共施設を光ファイバー網で結ぶ情報ネットワーク。下水道事業に合わせて整備したもので、村民と役場、診療所、総合福祉センター、学校などの公共施設が通信ネットワークで結ばれ、家庭にしながら村の情報をキャッチできる。無料でパソコンが貸し出されているほか、光ケーブル網を利用したケーブルテレビに無料加入でき、村役場内に設けられたスタジオからの放送で、泊村長杯選抜アイスホッケー大会、祭り、運動会など村内のイベントも観ることができる。



役場内にあるスタジオで番組制作をする職員

番組は役場職員が撮影・制作している。地上・BSデジタル放送の視聴もできるため、村内の住宅にはテレビアンテナが立っていない。

また希望者には、パソコンと血圧計などを連動させた「在宅健康管理システム」や、独居老人宅での人感センサーを使った「安心システム」などの利用も可能となっている。

# Mu Anale ～ 専門家の視点から～

本財団では、電源地域の抱えている課題の克服や問題の解決に向けて、地域振興に関する各分野の専門家による現地指導や各種調査を実施しております。そうした地域振興専門家の活用ポイントなどを専門家自ら紹介していただきます。

## テーマ

### 商品開発におけるコンセプトづくり

## 講師



#### 有限会社 職彩工房たくみ

おざき まさとし  
代表取締役 尾崎 正利 さん

福岡県大野城市在住。2003年に有限会社職彩工房たくみを設立。自社にて果物・野菜の加工を行うほか、九州をはじめ各地の農漁業の流通・販売・加工の振興に関わり、食品加工の製造技術・生産管理・経営管理に関するアドバイスを手がけている。

過去、本財団客員研究員としてマーケティング調査を担当。現在、「加工ネット」（農産加工担い手ネットワーク）評議委員、「農林水産物・食品地域ブランド化支援事業」（農林水産省）プロデューサー、「食卓の向こう側」（西日本新聞）講師、「食と農の応援団」（社団法人農山漁村文化協会）講師、「直売所講座」（財団法人都市農山漁村交流活性化機構）講師を歴任。

**尾崎さん**…いま世の中には魅力的な商品がたくさん出回っています。その中で「いい商品」と認識されているものに共通するのは、商品づくりにおいて地域の素材の良さをどのように生かそうとしたのか、また、他産地の商品との差をどう表現しようとしたか、生産者の思いをどのように商品に込めたか、なぜこのデザインを選んだのか、などといった点が分かりやすいことです。こうした商品においては、商品コンセプト、すなわち商品全体を貫く基本的な考え方が大切にされています。商品コンセプトが大切にされているか

**質問1**…地元の素材を用いて特産品を開発したが売れ行きが悪いので、商品改良や販路開拓を実施してほしいという依頼を受けることがあります。こうした依頼を受けると、商品改良や販路開拓以前に考えるべき課題を見落としているのではないかと感じる場合があります。

## Point

### その商品は何がウリなのか考え抜くこと

## 案件

本財団は、アドバイザーの現地派遣、マーケティング調査等を実施し、特産品開発・販売を支援しているが、商品の本質の議論なしに商品改良や販路開拓などの顕在化している課題の解決を現地から依頼されることが時々ある。最初に商品の本質を深く考えるべきと思うのだが。

**尾崎さん**…適切な商品コンセプトを生み出すには、自分たちが何を売ろうとしているのかについて、組織として深く考えることが必要です。それには、助言を与えるコンサルタントなど、外側からの働きかけだけでなく、組織の

**質問2**…商品コンセプトを生み出すにはどうすればよいのでしょうか。

どうか、商品の人気や売上に大きく影響しています。小手先の商品改良や販路開拓等だけでは人気や売上が高めることはできません。私に関わっている案件で、農商工連携事業などで地域の素材を生かし商品開発を進めている地域があります。ここでは、「地域の新鮮な素材をお客さんに味わってもらおう」、「地元の伝統的な製法の上に新しい素材を組み合わせて新しい味を提案しよう」等の商品開発に向けた基本的思想を関係者が明確に意識しています。

経営方針や体質、これまでの商品開発、製造、販売等についての現状認識および反省が必要となります。

過去の製法や技術を守ることに固執し新製品開発への合意形成ができない組織、消費者のニーズに応える仕組みが定着していない組織の場合、適切な商品コンセプトを生み出すことは困難でしょう。

私関わった事例を紹介しますと、ある農産加工グループは商品の製法や味付けを開業当時から全く変えていないのを自慢されていましたが、製造のレシピを見せてもらうと製品の旨味をわざわざ損なうような製法を堅持していました。そのことに触れると「実はお客さんからこの商品には旨味が乏しいという声があると直売所の方から時々言われている」との答えが返ってきました。

この事例では、「昔ながらの製法を二十年間守ってきた」ということよりも「旨味を逃さない製法にチャレンジして素材の美味しさを生かした」という方が消費者と産地の双方にとって有益である、という私の助言を採用して頂き、ようやく新しい製法に着手することになりました。組織に柔軟性が欠けていたら従来の製法を続けていたことでしょうか。

**質問3**…商品コンセプトを実際の商品づくりに反映させるにはどのようなことが大切なのでしょうか。

**尾崎さん**…商品の本質を突き詰めて考えることにより、商品の販売対象として狙うべき客層、その客層に何を訴えるべきかがはっきりしてきます。その後、その客層に対し自社商品と同様の特性を訴える競合商品の特定、競合商品に競り勝つための価格設定やPR方法の工夫などマーケティングの作業を加えて商品としての体裁を整えていきます。

実際には初期の段階で販売実績が挙げられない商品も多数あります。商品の形状、内容量、包装資材、保存温度など、改善したい部分が後からどんどん出てきます。商品コンセプトを意識しながら、こうした改善点に向き合い、商品の完成度を高めていくことも大切なことです。

また商品コンセプトが明確だとマーケットの状況に応じて販売先を修正することが可能になることがあります。事例として福岡県豊前市の「豊前棚田ゆず振興協議会」の商品「ゆずペースト」を紹介します。

この商品は、ゆずを通年利用しようと考えて産み出した素材加工品であり、ゆず生産者および加工事業者の所得向上を意図して開発されました。商品コンセプトは「素材のフレッシュ感

を生かす下処理加工品」であり、客層として地元の菓子メーカーや調味料メーカーを想定していました。意外にも県外からの引き合いが多く、今年春にはフランスへの輸出も始まりました。「素材のフレッシュ感を生かす下処理加工品」というコンセプトから

生まれた商品の味は、県外および海外の料理店や菓子メーカーのニーズに合ったと考えられます。当初から加工素材として使うためにコストを抑えた製法を確立してきたことも、手頃な価格となって供給できた要因の一つでしょう。



風味豊かな豊前の棚田ゆず  
(写真提供 道の駅豊前おこしかけ)



フランスでも好評なゆずペースト  
(写真提供 道の駅豊前おこしかけ)



「産品相談・商談会」のご案内

当センターでは、電源市町村の地域資源のブランド化支援等を目的とした取組みとして、各地域で生み出された産品（特産品）の開発・改良及び販路拡大につながる「産品相談・商談会」を年四回実施します。

■平成二十二年下期の予定

《第三回産品相談・商談会》

日程：平成二十二年十一月二十四日（水）

会場：東京都立産業貿易センター

《第四回産品相談・商談会》

日程：平成二十三年二月三日（木）

会場：福岡銀行本店

■バイヤーとの個別面談

「産品相談・商談会」では、大手百貨店やスーパーのバイヤーとの個別面談を通じて、バイヤーから見た消費者のニーズ・地域性・流行など、現在の流通業界における商品開発の考えに基づいた「売れる商品づくり」について様々な角度からアドバイスを行います。

更に、バイヤーから高い評価を受けた特産



平成22年度第1回の開催風景

品については、店舗等における商品取引につながることも可能ですので、販路の拡大にも最大限にご活用いただけます。

■パッケージデザイナーのアドバイス

「産品相談・商談会」の特徴として、商品パッケージ専門のデザイナーからアドバイスを受けることができる「デザイン相談」を実施しています。「見た目の訴求力を強化したい」といった課題に特化した相談に応じています。

■現地開催も実施いたします

「産品相談・商談会」は、年四回の通常開催以外にも、地域のご要望に応じた現地開催型の実施も受け付けています。ご予算等に応じて実施内容のご提案をさせていただきますので、お気軽にお問い合わせください。

【お申込・お問い合わせ先】

（財）電源地域振興センター  
振興支援部 販売支援課

電話：03-6372-7310

ホームページ：http://www2.dengen.or.jp/html/works/hanbai/sanpin.html



「でんきのふるさとふれあいの森」が開催されます

当センターでは、平成二十二年十月二十九日（金）、三十日（土）の両日、東京・新宿駅西口広場イベントコーナーにおいて「でんきのふるさとふれあいの森（主催：省エネルギー・新エネルギー普及啓発実行委員会（東京都・新宿区・双葉町・大熊町・富岡町・

檜葉町・広野町・柏崎市・刈羽村・東京商工会議所・東京都商工会連合会・東京電力株式会社）」を実施します。

このイベントは、首都圏の方々から電力発電を始めとした電力の供給状況や課題をわかりやすく紹介し、エネルギーの大切さや地球環境問題への意識を高めていただくとともに、電力生産地の物産、伝統芸能、観光紹介を通じて生産地に対する理解や消費地と生産地の交流のきっかけを創出する目的で開かれます。

当日は、各地域の物産販売・観光案内をはじめ、原子力、省エネ、新エネの紹介や自転車型発電機によって稼動する機関車などのアトラクションが楽しめます。

【お問い合わせ先】

（財）電源地域振興センター  
振興支援部 販売支援課

電話：03-6372-7310



「企業誘致支援サービス事業」のご案内

当センターでは、電源市町村の企業誘致活動を支援する目的で「企業誘致支援サービス事業」を展開しています。

この事業は、企業が原子力立地地域に事業所等を新設、移転等した場合に電気料金の大幅な割引が受けられる制度（F補助金）を全国の企業に広くPRすることを中心に、数千社の企業へのアンケート調査を行いながら、電源

市町村への企業誘致をサポートさせていただきます。

今年度は八つの自治体から事業を委託し、それら自治体に所在する工業団地等を、アンケート先の企業約五千社にパンフレットで紹介等しながら、自治体と企業との間を積極的に取り持つ活動を行っています。その一環として、七月十四日から三日間、東京ビッグサイトで開催された「企業誘致フェア2010（主催：社団法人日本経営協会）」に出展し、来場された企業関係者の方々等にF補助金と自治体のPRを積極的にさせていただきました。

【お問い合わせ先】

（財）電源地域振興センター  
振興業務部 企業誘致課

電話：03-6372-7308

ホームページ：http://www2.dengen.or.jp/html/works/yuchi/index.html



「エネルギーシンポジウム 柏崎・刈羽」のご案内

当センターでは、平成二十二年十一月二十九日（月）と三十日（火）の両日、新潟県柏崎市・刈羽村において、「エネルギーシンポジウム in 柏崎・刈羽」（副題：かがやくまち柏崎 ここちよいまち刈羽 ―共生のまちづくり― 主催：経済産業省資源エネルギー庁、柏崎市、刈羽村）を実施いたします。

この「エネルギーシンポジウム in 柏崎・刈羽」は、全国の原子力立地地域の自治体職員、地域振興の関係者およ

び開催地の住民を対象に、地域振興に資する地域振興事例の紹介・情報提供等の内容によるシンポジウムを実施することにより、参加者の地域振興に関する実践力を高め、自治体職員間等の情報交換を図ることを目的に実施いたします。

初日(十一月二十九日)は開会式のあと開催地柏崎市の紹介や学識経験者による講演会と資源エネルギー庁代表や刈羽村長、学識経験者とのパネルディスカッションを行い、二日目(十一月三十日)には開催地柏崎市と刈羽村の各施設を巡り、現地関係者と参加者との現地意見交換会の開催を予定しております。

参加お申込等についての詳細は当センターのホームページをご参照ください。

【お問い合わせ先】

(財)電源地域振興センター

振興支援部 普及啓発課

電話：03-6372-7312

ホームページ：http://www2.dengen.or.jp/html/works/enesymp/index\_2010.html



「でんきのふるさと青森」  
北半島元気祭り「ごはんミ  
ュージウム」を実施しました

当センターでは、平成二十二年九月十七日(金)、十八日(土)の二日間、東京国際フォーラム一階Aブロック「ごはんミュージウム」において「でんきのふるさと 青森 下北半島元気祭り

りinごはんミュージウム(主催：東京電力株式会社)を実施いたしました。

下北半島の特産品の販売コーナー、下北半島の歴史や観光案内の展示コーナー、イベントステージに分かれた会場では、電源市町村と電力消費地の相互理解に向けた様々な特産品販売やプログラムが催されました。

中でも、むつ市のイメージキャラクター「ムツシユ・ムチュラン一世」の着ぐるみの登場や、産品を使った料理教室、青森出身の落語家による寄席や「ホタテ釣り」、下北半島の「歴史トークショー」などが、多くの来場者の好評を得ていました。

【お問い合わせ先】

(財)電源地域振興センター

振興支援部 普及啓発課

電話：03-6372-7312



今号のプレゼント

今号の「トップにきく」にご登場いただきました泊村役場のご厚意により、純米吟醸酒「泊の宴」(720ml)と純米酒「とまり兜伝説」(720ml)のセットを五名様にプレゼントいたします。

■プレゼント応募方法

とじ込みのアンケートはがきに必要な事項をご記入して郵送もしくは、当センターのホームページ(文末参照)の入力フォーム内のアンケートにご記入

## 「電気のふるさと」 フォトコンテストの実施について

当センターでは、電源地域における人々の暮らしをテーマに写真を募集します。電源地域で暮らす人々の日常生活、訪れる人々が楽しんでいる姿、地域の人々が誇りに感じている風景など、生活感にあふれる写真を期待します。

募集は平成22年10月1日より行います。

### ■募集のご案内

詳しい実施内容は10月1日、当センターのホームページに掲載いたします。意欲的な方々の応募をお待ちしております。

なお、応募された作品は厳正なる審査の上、最優秀賞および優秀賞を決定します。審査結果は平成23年6月、当センターのホームページおよび「電気のふるさと Vol.24」にて発表します。

最優秀賞作品の応募者には3万円相当の賞品を、優秀賞作品の応募者には1万5千円相当の賞品を贈呈いたします。

【お問い合わせ先】

(財)電源地域振興センター  
電気のふるさと編集室

電話：03-6372-7312

ホームページ：http://www2.dengen.or.jp



の上、「送信」ボタンを押して送信してください。

×切は平成二十二年十月二十九日。アンケートはがきは当日消印有効です。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。

【アンケートおよびプレゼントに関するお問い合わせ先】

(財)電源地域振興センター

振興支援部 普及啓発課

電話：03-6372-7312

ホームページ：

http://www2.dengen.or.jp/html/leaf/furusato/enquete.html



【「泊の宴」、「とまり兜伝説」に関するお問い合わせ】

泊酒販組合(泊村商工会内)

〒045-0202

北海道古宇郡泊村大字茅沼村字北坂ノ上129番地2

電話：0135-75-3231 FAX：0135-75-3167

E-mail：tomari@cocoa.ocn.ne.jp



# 鯨<sup>にしん</sup>御<sup>ご</sup>殿<sup>てん</sup>とまり

泊村でニシン漁が始められたのは今から約三百年前と言われています。明治になって、ニシン漁が全盛期を迎えると、泊村には、五十を超える鯨番屋が建ち並び、ニシン漁によって莫大な富をもたらした鯨番屋は泊村の繁栄の象徴でもあったのです。

当時の繁栄を現在に伝えるこの移築、復元された二つの建物は、明治二十七年に親方の川村慶次郎氏が建設した「旧川村家番屋」と、大正五年頃に武井忠吉氏によって棟続きで建設された「旧武井邸客殿」でどちらもニシン漁が盛んだった

当時の泊村の姿をいきいきと想像させます。また、館内には当時の泊村のニシン漁の様子を物語る貴重な資料が展示保存されており、泊村の郷土文化を後世に伝えるための資料として、広く一般に公開されています。

▼「旧川村家番屋」の「漁夫だまり」。漁場を経営する親方と雇った漁夫たちが共同生活をする独特の構造となっている。



▲右が「旧川村家番屋」で左が「旧武井邸客殿」。ともに泊村有形文化財に指定されている。

▼「旧武井邸客殿」の「商談の間」。往時の漁家経営者の豪勢な生活ぶりが偲ばれる。



また、館内には当時の泊村のニシン漁の様子を物語る貴重な資料が展示保存されており、泊村の郷土文化を後世に伝えるための資料として、広く一般に公開されています。

【開館時間】 午前9時30分～午後4時30分

【休館日】 毎週月曜日(月曜日が祝日の時は、その翌日)  
11月下旬～4月中旬

【観覧料】 大人(高校生以上)300円  
小人(小中学生)200円  
団体(20人以上)は100円/人

■お問い合わせ先  
鯨御殿とまり  
北海道古宇郡泊村大字泊村59-1  
TEL.0135-75-2849  
泊村教育委員会  
TEL.0135-75-2311

■交通  
岩内バスターミナルより、神恵内線「法輪寺」下車

